慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「第二の生」を求めて： ムージル作品の神秘主義における子供の役割について
Sub Title	Ins ,,zweite Leben" : Über Kinder und Mystik bei Robert Musil
Author	宮下, みなみ(Miyashita, Minami)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2017
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.34 (2017. 3) ,p.48- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20170331-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「第二の生」を求めて

――ムージル作品の神秘主義における子供の役割について――

宮下みなみ

1. 導入

1-1. ムージルと子供

ローベルト・ムージル（1880-1941）は子供が大の苦手であった。亡命先のジュネーブで、ムージル夫妻はある乳児院の一室に逗留所を見出したものの、クリスマスの夜の子供たちの騒ぎに辟易した彼は、1939 年エルヴィン・ヘクスナー[1] 宛ての手紙の中で、以下のように語っている。「ぼくが生涯幼い子供をカタツムリみたいに思って避けてきたことを知っている人には、このおかしな夜がいったいどんなものだったか、それは明らかだ」[2]。ムージルの伝記作家コリーノは、彼がそこまで子供を嫌っていた理由を、「子供たちの寄る辺ないさま」、「明瞭な発音をする能力の欠如」、「おぼつかない身のこなし」を見ることが、彼にとって「自己愛に対する侮辱」であったという点に見出している[3]。

しかし、このように子供に対する著しい嫌悪感を抱いていたにもかかわ

---

1) Ervin Hexner（1893-1968）はスロバキア出身の経済学者・法学者。この手紙が書かれた当時、チューリッヒに亡命したムージル夫妻のパトロンのひとりであった。

2) Musil, Robert: *Briefe 1901-1942. Mit Briefen von Martha Musil, Alfred Döblin, Efraim Frisch, Hugo von Hofmannstahl, Robert Lejeune, Thomas Mann, Dorothy Norman, Viktor Zuckerkandl und anderen*. Hrsg. von Adolf Frisé. Unter Mithilfe von Murray G. Hall. Reinbek: Rowohlt 1981 [Bd. 1 und 2]. Bd. 1, S. 1131.

3) Corino, Karl: *Robert Musil. Eine Biographie*. Reinbeck: Rowohlt 2003. S. 25.

らず、ムージルの処女作『寄宿生テルレスの混乱（*Verwirrungen des Zöglings Törleß*）』（1906 年）[4] においては 12 歳の少年が主人公となっている。彼の作品のなかで子供が登場することは極めてまれであり、子供が中心的な役割を担っているのはこの作品のみである。子供嫌いにもかかわらず、彼が自らの処女作においてあえて子供の視点を選び取ったのはいったいなぜだろうか。本稿はその理由を、ムージルの文学において特徴的な要素である神秘主義的傾向との関連に見出す。そしてこれに基づき、処女作『テルレス』だけではなく、後期の作品においても、子供が重要な役割を担っているという観点を提供していく。

1-2. 先行研究と比較した本稿の位置づけ

『テルレス』は、ムージルがシュトゥットゥガルト工科大学の助手であったときに発表された。この作品の主人公テルレスは泰然とした宮廷顧問官である父親と、息子を過保護気味に愛している母親の元を離れ、幼少期から青年期に移っていく「混乱」の時期を軍人養成の寄宿舎で過ごしていく。テルレスと同様、ムージルが子供時代に寄宿学校での生活を体験したことは、見逃せない伝記的事実である。彼は 12 歳から 14 歳までアイゼンシュタットの陸軍初等実科学校、14 歳から 17 歳までメーリッシュ・ヴァイスキルヒェンの陸軍上級実科学校に籍を置き、軍人養成教育を受けてきたのだった。これまでの研究により、この作品の主要登場人物のモデルは明らかに当時の彼の同級生であり、彼自身の体験と作品世界が緊密に結びついていることが裏付けられてきた[5]。また、この作品は 1900 年前後のドイツ・オーストリアにおいて多く現れた「学校小説」のひとつとしても理解されてきた[6]。それらに共通しているのは、寄宿学校やギムナジウム

---

4) 以下『テルレス』と表記する。

5) 『寄宿生テルレスの混乱』におけるムージル自身の体験の反映に関しては、特に Corino, a. a. o. S. 108ff.において詳細に論じられている。

6) この時代の「学校小説」としては、主要作品だけでも、エッシェンバッハ『優等生（*Der Vorzugsschüler*）』（1901 年）、リルケ『体操の時間（*Die Turnstunde*）』（1902 年）、シュトラウス『死神（*Freund Hein*）』（1902 年）、R. ヴァルザー『フリッツ・コッヒャーの作文（*Fritz Kochers Aufsätze*）』（1904 年）および

という機関が、ヴィルヘルム二世治下のプロイセンあるいはハプスブルク家の父権的オーストリア＝ハンガリー帝国における権力システムの一端として機能していることに対する批判である。また、近代産業社会の急速な発達に伴う即物主義的・実用主義的価値観の敷衍に対する学校生徒側の視点を通じた懐疑心も、これらの作品が共通して提示しているテーマである[7)]。このような批判意識は、『テルレス』のなかにも読み取ることができる。この観点に基づき、クレーマーは寄宿学校をひとつの社会モデルとして捉え、テルレスが寄宿学校における「社会化」に失敗したことを指摘している[8)]。またバウアーは、伝記的側面に対するアプローチに偏り過ぎていた先行研究に対する批判から出発し、寄宿学校でのテルレスの葛藤が同時代の社会に対する批判につながっているというテーゼを提示している[9)]。個性を無視し生徒を操り人形のように扱う機械的教育システムや、性を表面的にはタブー化しながら商業的には利用しようとする社会の欺瞞など、この作品には、テルレスの個人的な葛藤にとどまらない、社会全体が抱える問題に対する批判意識が織り込まれているといえよう。さらにバウアーは、この時代に青少年が本格的に学問的研究の対象にされるようになったことを指摘する[10)]。これが「学校小説」が多数生み出されたことの

『ヤーコプ・フォン・グンテン（*Jakob von Gunten*）』（1909 年）、H. マン『ウンラート教授（*Professor Unrat*）』（1905 年）、H. ヘッセ『車輪の下（*Unterm Rad*）』（1906 年）、フーフ『マオ（*Mao*）』（1909 年）などが挙げられる。

7) 世紀転換期の「学校小説」に関しては、Imai, Atsushi: *Das Bild des ästhetisch-empfindsamen Jugendlichen : deutsche Schul- und Adoleszenzromane zu Beginn des 20. Jahrhunderts*. Mit einem Geleitwort von Johann Holzner. Wiesbaden:Deutscher Universitäts-Verlag 2001. S. 1-44. を参照した。

8) Kroemer, Roland: *Ein Endloser Knoten? Robert Musils „Verwirrungen des Zöglings Törleß“ im Spiegel soziologischer, psychoanalytischer und philosophischer Diskurse*. Musil-Studien Bd. 33. München: Wilhelm Fink 2004. S. 22f.

9) Bauer, Uwe: *Zeit- und Gesellschaftskritik in Robert Musils Roman „Verwirrungen des Zöglings Törleß“*. In: *Von Törleß zum Mann ohne Eigenschaften*. Hrsg. v. Uwe Bauer und Dietmar Goltschnigg. Musil-Studien Bd. 4. München: Wilhelm Fink 1973. S. 19-45.

10) その背景には、少年犯罪の劇的な増加という事実がある。1898 年から 1906

背景を成しているといえよう。この状況を踏まえ、『寄宿生テルレスの混乱』を社会批判の書、あるいは子供の心理・知覚研究の書として捉えることは確かに可能である。しかしこの作品においては、このような同時代の批判にとどまらず、さらに主観性と客観性をめぐる超時代的な哲学的問いとの対峙が決定的な課題となっていることに注目したい。この作品において、テルレスの主観性はひとつの重要なテーマとなっている。この作品をテルレスの主観性構築の物語と捉える解釈も多く、たとえばフーダーは「静止」のモチーフをテルレスが戦う強固な現実の象徴であるとし、それに対してアナロジカルな視点で世界を認識しようとするテルレスの主観的意識に積極的な意義があると主張している[11)]。またホーヴァルトは、主観性に支えられた感覚と客観性に支えられた認識という対立項がこの作品の軸を成していることを指摘し、感覚は詩学の原理に、客観性は学問の原理につながっていくが、この作品においては心理学に対する懐疑を前提とし前者を擁護する姿勢が提示されていると結論付けた[12)]。確かにテルレスの主観性はこの作品が収斂していく焦点であるといえる。しかしテルレスが見出していく主観性は、一般的な意味での主観性とは異なることを指摘せねばならない。というのも、テルレスの主観性は、自覚や意思に基づいて行動したり作用を及ぼしたりする人間存在の自我とは一線を画しているからだ。それは西洋近代以降の自我概念に支えられた主観性ではなく、生の全体を突然とらえる神秘主義的直観に支えられた主観性であるのではない

年の間に少年犯罪率は 32.2 パーセントの増加を記録している。これは重大な社会問題とみなされ、その解決方法を学問的に見出そうとする動きが強まった。子供の心理学研究はその一環として発展した。Ebd. S. 42.

11) Fuder, Dieter: *Analogiedenken und Anthropologische Differenz*. Musil-Studien Bd. 10. München: Wilhelm Fink 1979, S. 42-53.

12) Howald, Stefan: *Ästhetizismus und ästhetische Ideologiekritik*. Musil-Studien Bd. 9. München: Wilhelm Fink 1984, S. 18-80. また、ホーヴァルトと同様、井上修一の研究においても理性的思考の限界と感覚による世界把握の意義が強調されている。井上修一：ムージルの『テルレス』について一理性的思考と感覚的認識〔宮崎大学『教育学部紀要　人文科学』第 59 号、1983 年、65-77 頁〕参照。

だろうか。本稿では以上を前提とし、これまでの研究で等閑視されてきた『テルレス』の神秘主義的傾向に注目しつつ、ムージルが描き出す神秘主義的直観の表現には、子供の視点が欠かせない要素となっていることを明らかにしていく。

1-3. 神秘思想とムージル

19 世紀後半から 20 世紀前半、ヨーロッパでは神秘思想が再評価された。当時、合理主義を掲げる科学技術や産業の発達に伴って激化した階級闘争、民族闘争、政治危機、世界大戦前後の終末観のなかで、自己存在に対する不安や懐疑が人々の心に渦巻いていたのだった。このような歴史的背景を見据え、この時代の少なからぬ作家たちは古代・中世の思考法に打開点を見いだそうとしている。荒れ狂い人々を混乱に陥らせる歴史の大波の下にはいわば死んでいない古代・中世の深海が広がっているという認識に、少なからぬ作家たちが人間存在の謎を解く鍵を探し求めたのである。この潮流のなかで中世神秘思想家の著作集の出版も進められ、1907 年にビールマイヤーがゾイゼの、1910 年にはユッターがタウラーの批判版著作集を世に出した[13)]。そしてエックハルトの新版著作集も 1857 年にプファイファーによって出版され[14)]、その後 1903 年にはビュットナーによる新高ドイツ語訳版が出版され始めている[15)]。ヴァーグナー・エーゲルハーフは、世俗化していく教会の圧力の下で異端宣告を受けながらも独自の豊かな思想を発展させていったエックハルトが、当時の「システムから離脱する」、

---

13) *Heinrich Seuse, Deutsche Schriften*. Hrsg. v. Karl Bihlmeyer. Im Auftrag der Wüttembergischen Komission für Landesgeschichte, Stuttgart: Kohlhammer1907. および *Die Predigten Taulers. Aus der Engelberger und der Freiburger Handschrift sowie aus Schmidts Abschriften der ehemaligen Strassburger Handschriften*. Deutsche Texte des Mittelalters Bd. XI (Hrsg. v. der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschafen). Hrsg. v. Ferdinand Vetter. Berlin: Weidmann 1910.

14) *Deutsche Mystiker des vierzehnten Jahrhunderts. Meister Eckhart*. (Bd. 2) Hrsg. v. Franz Pfeiffer. Leipzig: G. J. Göschen 1857.

15) *Meister Eckharts Schriften und Predigten*. Aus dem Mittelhochdeutschen übersetzt und hrsg. Hermann Büttner. Leipzig: Eugen Diederichs1903.

「格別」で「特異」な存在として捉えられていたことを指摘している[16)]。ここで重要なのは、エックハルトが当時受容された際に、彼の思想のアクチュアリティが強調されていたという点である。その理由として、第一に、複雑化していく近代の社会システムに巻き込まれて自己を見失いつつある人々にとって、偉大な「異端者」エックハルトはある種刺激的な存在であったことが挙げられる。また第二に、進歩主義的に科学技術が発達すればするほど、その限界にも気づかれ始め、新たに自らの文化の基盤に立ち返るという流れが生まれてきたという背景もある。科学によって細胞や原子の構造が解明されても、生の機能そのもの、あるいは「なぜ生きているのか、生きるとはなにか」という問いそのものを解明することはできない。そうであるから、進歩主義から離れた思想家や芸術家たちは、自らの文化の基盤を成しているはずの中世文化へと立ち返り、自らの時代の文化と中世文化のつながりを認識することに活路を見出そうとした。この潮流の中で、ムージルも若いころから積極的にエックハルトの著作を読んでいたのだった。つねに「最新」を志向する科学技術に携わっていたことからもわかるが、ムージルは時代・文化の最先端を求める意識が高かった。したがって、この時代の文化をリードする芸術家や思想家が注目していた神秘的思想に、彼も強く惹かれたことは不思議ではないだろう。

『テルレス』においてはこれまでメーテルリンクやエマソンの思想の影響関係から神秘主義的傾向を指摘されてきた[17)]。しかしこの作品には、エックハルトに代表されるドイツ神秘主義との照応が認められるのではないだろうか。ムージルは日記のなかでテルレスが出版される 1906 年までに 9 回「神秘主義」、「神秘主義的」あるいは「神秘家」という言葉を使っており、特に 1905 年の日記では、彼がリカルダ・フーフの『ロマン派の黄金時代（*Blütezeit der Romantik*）』に触れ、「ぼくの課題はロマン派と神秘家のもとに弟子入りすることだ」と述べる箇所が認められる[18)]。彼はドイ

---

16) 原文は „besonder“, „eigenartig“, „Herausfallen aus dem System“となっている。Vgl. Wagner-Egelhaaf, Martina: *Mystik der Moderne: Die visionäre Ästhetik der deutschen Literatur im 20. Jahrhundert*. Stuttgart: Metzler 1989, S. 29.

17) Vgl. Kroemer. a. a. O. S. 135-140.

18) Musil, Robert: *Tagebücher in 2 Bänden*. Hrsg. v. Adolf Frisé. Reinbek: Rowohlt

ツ・ロマン派の受容と同時に、ドイツ・ロマン派がオマージュとしていた中世神秘思想への関心も深めていき、1908 年の日記にはマイスター・エックハルトの思想に直接言及している[19]。この考察から、ムージルが『テルレス』を出版する前から中世神秘思想の探究に目覚めていたことが確かめられる。以下の節ではこの事実に基づき、この作品と神秘思想の結びつきを具体的に論じていくこととする。物語が展開する中でテルレスは「混乱」を経験し、直観の領域である「第二の生」の存在を見出すようになるが、本稿はまずテルレスの「孤独」と、それに付随したモチーフである「沈黙」の意味について考察する。そのうえで、さらにこの「孤独」と「沈黙」は神秘主義の文脈において重要な役割を果たす概念であることを念頭に置き、テルレスのいう「第二の生」と神秘主義の文脈における生の直観の類似を指摘する。そしてさらにムージルの神秘主義的直観の表現には子供の視点が不可欠であることを、『黒つぐみ（*Die Amsel*）』（1928 年）や『特性のない男（*Der Mann ohne Eigenschaften*）』（第 1 巻 1931 年、第 2 巻 1933 年）といった後期の作品にあらわれている神秘的直観の表現との比較を交えて明らかにしていく。

また、「子供」の定義に関してここで言及しておきたい。テルレスは 12 歳であると設定されているが、これは幼児でもなく、青年でもない、いわば境界的な年齢である。「子供」と呼ばれる年齢には広い幅があると言える

1976. Bd. I, S. 139 und Bd. II, S. 84.『ロマン派の黄金期』内『象徴的芸術』の章（329-346 頁）においては、以下のような記述がみられる。「哲学、宗教、詩学が重なり合う点は、神秘思想に存する。神秘主義は—彼ら〔宮下：ティークおよびゾルガー〕が言おうとしたことを、私たちは神秘思想という言葉で適切に言い表せるのだが—世界や神と結びついた認識を直接的に感じることである。芸術は神秘思想の応用なのだ。」（345 頁）

19) Musil: *Tagebücher in 2 Bänden*. Bd. II, S. 897.　ここでムージルはエックハルトの説教 5b に関わる認識論を書き残している。ムージルが引き合いに出すのは、エックハルトが説いた炎と木の比喩である。炎は、木がもってい「無い」ものをもっているがゆえに木を焼くのであり、もし木が炎の本性を全てそなえたならば、炎が木を焼きさいなむことはない。この例から出発し、エックハルトは神と人間の魂の合一を妨げる「無」を去ることで、完全に神と魂が合一した状態が生まれると説いている。

が、ムージルが描き出す「子供」において、具体的な年齢はあまり意味をなさない。より重要なのは、彼の作品における「子供」が、自己意識が固まりきっていない境界的な存在として捉えられているという観点である。

2. 作品分析

2-1. 孤独

まずテルレスの「混乱」と強く結びついている感覚として、孤独が挙げられる。この作品においては冒頭から、「見捨てられた」というテルレスの意識が強調されている。彼は幼少時に女中によって森の中に置いてきぼりにされた経験を、友人バイネベルクに語っている。

> 日が暮れていくあいだには、いつも独特の瞬間があるにちがいない。観察するたびに、同じ記憶が戻ってくるんだよ。まだとても小さかった頃、ちょうどこういう時間に森で遊んでいたことがある。女中は遠くに行ってしまっていた。（…）突然、何かに強制されて目をあげた。ぼくしかいないことに気付いた。突然、すっかり静かになった。（…）ぼくは泣いた。大人たちに見捨てられたと思った。命のない被造物に引き渡されたと思った…。それはどういうこと？何度も味わう感じなんだけど。耳には聞こえない言葉みたいな、突然の沈黙だろうか？[20]

テルレスはここで、幼少時の「見捨てられた」体験の「同じ記憶」が蘇ることがしばしばあり、そのときの感覚を「何度も味わう感じ」であると話している。まだ大人の庇護を必要とする幼いテルレスが孤独の中、たったひとりで大きな世界と対峙しなければならなくなったとき、彼はただ途方に暮れるしかない。しかし 12 歳のテルレスは、そのときの寄る辺なさや

---

20) Musil, Robert: *Verwirrung des Zöglings Törleß*. In: Gesammelte Werke in 9 Bänden. Reinbek: Rowohlt 1978. Band 6. S. 23f.　以下『テルレス』からの引用に関しては、ローベルト・ムージル（丘沢静也訳）：寄宿生テルレスの混乱〔光文社、2008 年〕を適宜参照した。

恐怖感からできる限り距離をとり、「見捨てられた」ときの感覚の意味を読み解こうとしている。さらに、「命のない被造物に引き渡された」という表現からは、テルレスが感じている「見捨てられた」感覚に付随した神と向き合う人間をめぐる宗教的な意味合いを読み取ることができる。人間たちの世界から放り出され、自分を守ってくれる庇護を全て失うという状況は、宗教的体験と結びつくといえるだろう[21)]。そして孤独のなかにあるテルレスは、「ほんの一瞬」ではあるが、日常世界を離れた神秘的な状態を体験する。その「ほんの一瞬」とは、「深刻な秘密に耳をそばだて」、「まだ書かれていない関係をのぞきこむこと」に「耐えられた」一瞬である[22)]。しかしながら、彼が人間の日常世界から離れた超越的存在に近づいたかと思われるこの一瞬は、脆さをはらんでいる。なぜなら、この刹那が過ぎたあと、彼の孤独は官能のうずきへと収斂していくからだ[23)]。確かに、この作品におけるセクシュアリティの問題は見逃すべきではない。しかしながらこの作品を、テルレスの孤独をめぐる葛藤を自らの官能の目覚めの

---

21) このことは特に神秘主義の文脈において重要な意味をもつ。たとえばエックハルトは、一切の被造物性ないし利己性からの徹底的脱却に加え、概念的・人格的な神からの完全な脱却を意味する「離脱」を強調する。この「離脱」は「無の荒野」ともいわれ、そこでこそ永遠の生命が突発的に発現するのである。(岡部雄三：ドイツ神秘主義の水脈〔知泉書館、2011 年〕29-32 頁参照。)さらに、両親に守られて過ごした楽園的な故郷から罪多き世界へと追い出されるテルレスの姿に、人間の堕罪との照応関係をみることも可能である。(Vgl. Kroemer: a. a. O. S. 90f.)

22) Musil: *Törleß* . S. 24.

23) テルレスは、寄宿学校に入学する前年の夏、別荘で両親が彼を室内に置き去りにして戸外でふたりだけの時間を過ごしているとき、「見捨てられた」感覚を味わったとも叙述されている。彼はまずその際の感覚を、「夜、窓を開けて座ったまま、見捨てられたと感じること」、「自分は大人とは違うんだと感じること」、「みんなから笑われ、みんなから軽蔑の目で見られて、誤解されたまま、自分が何者なのかを誰にも説明できないこと」であると述べる。そしてさらに、自分のこれらの感覚を「理解してくれるかもしれない女性にあこがれること……それが愛なのだ！けれどもそのためには、若くて孤独でなければならない」という結論に至る。このエピソードでは、「見捨てられた」感覚と官能の結びつきが色濃いといえる。Vgl. ebd. S. 34.

みに還元してしまう解釈は皮相であるというべきだろう。テルレスの前に立ちはだかる、思春期の少年の官能がもたらす「混乱」は肉体と強く結びついており、それは肉体を越えた形而上の領域と彼を隔てる障壁となるからだ。むしろテルレスの葛藤は、思春期の官能の悩みを越え、意識や自我の領域を越えた自分と、神秘的・超越的存在とのあいだがつながる「第二の生」を見出す過程と捉えられるのである。孤独はその過程の内の一つの段階であるが、さらに次節では第二の段階である沈黙に注目し、この過程についてさらに分析を深めていく。

2-2. 沈黙

孤独のなかにあるテルレスは、しばしば沈黙に耳を澄ませるという身振りをみせている。このことは前節の引用内の、「見捨てられた」状況で彼が「耳には聞こえない言葉みたいな、突然の沈黙」を感じ、また神秘的刹那に「深刻な秘密に耳をそばだて」るといった記述から顕著である。彼にとっての沈黙の意味がとりわけ明らかにわかるのは、彼が独りで空を仰ぎ物思いにふける場面である。このときの彼は「空から秘密を聞きだせるかもしれない」と予感し、「深い孤独感」のなかで沈黙の状態について思いを馳せる[24]。まずテルレスは、「バジーニの身に起きたことを想像したとき、真二つに引き裂かれた」状態に陥ったという[25]。寄宿生バイネベルクとライティングが同級生のバジーニに対し習慣的に精神的・身体的いじめをするようになると、テルレスはあくまで観察者の立場を守り、自ら積極的にそれに参与しようとはしない。しかし彼には完全に客観的な観察者の立場を貫くことができない。彼はバジーニの卑屈さに嫌悪感を抱き、距離を置こうと努めてはいるが、バジーニに対し関心を抱かずにはいられないのである。そして彼はこのような状況で、論理的思考の領域にある自分と、あくまで言語化を拒む直観的領域にある自分との分裂を意識する。「真二つに引き裂かれた」うち片方のテルレスは、論理的思考の領域を意味する「筋の通った日常的な」状態にあり、もう片方のテルレスは、直観の領域

24) Ebd. S. 65f.
25) Ebd. S. 63.

を意味する「かのイメージのなかで一瞬照らし出される沈黙」のなかにあるのだった[26]。バジーニいじめの観察によって引き起こされるありとあらゆるイメージ・像のひしめきをくぐり抜けるなかで「一瞬照らし出される沈黙」は、明らかに超越的存在そのものとして捉えられている。というのも、さらにその沈黙は「突然、現実として、生きたものとして扱われることを要求し」、テルレスは「あらゆる面から沈黙に囲まれていると感じた」[27]のだが、直後で以下のような沈黙の圧倒的な力が示唆されているからである。

> 沈黙は遠くの怪しい勢力のように、以前からテルレスを脅かしていたわけだが、テルレスのほうは本能的にそれを避けてきた。ときどき、おどおどした視線でちらっと見るだけだったのだ。ところが偶然のできごとにより、テルレスの注意が鋭くなり、沈黙に注目するようになったので、沈黙のほうも、合図されたみたいに、あらゆる方面から襲いかかり、とんでもない混乱をもたらした。[28]

この場面において、沈黙はテルレスを脅かす存在であることが示されている。沈黙が脅威となるという視点は、言語懐疑の姿勢を前提としているといえよう。テルレスの「混乱」の原因として言語懐疑があることに関しては既に複数の研究がなされているが[29]、ここでさらに、このような言語懐疑は神秘主義の根本姿勢のひとつであることを指摘しておきたい。

エックハルトのドイツ語著作集校訂者ヨーゼフ・クヴィント以来、神秘思想を「言語に対する闘い」であるとする認識が定着しており[30]、エック

---

26) Ebd.
27) Ebd.
28) Ebd. S. 64.
29) 大古多恵： R .Musil の初期作品にみられる言語への懐疑一言葉は感じられたもののための逃げ道〔『オーストリア文学』第 18 号、2002 年、1-8 頁〕および、清原明代： 詩人的生の受胎一ムージル『生徒テルレスの惑乱』における〈理念〉の形成〔九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第 21 号、2007 年、129-144 頁〕参照。また、Kroemer: a. a. O. S. 158-167 においても世紀転換期の言語危機と『テルレス』の関連が指摘されている。

ハルトの思想においても沈黙は少なからぬ重要性を持っている。たとえばエックハルトは説教第 36a 番「神を認識する能力」において、以下のように述べている。

> 神はむしろ一つの超越的存在であり超存在的無である。それゆえに聖アウグスティヌスは、神について人間が言いうる最もすばらしいことは、内なる豊かさの智慧からして沈黙しうることであると言うのである。ゆえに、沈黙せよ。(…) 罪なく完全であろうと欲するならば、神について口を開いてはならない。[31)]

このように、「一切の言表を回避して、非言語へと転じていく神は最終的に『沈黙』と呼ばれる」が、沈黙は「積極的な『無への帰還』であり、この浄化への道を通って無となった空間に神の御言が響く」[32)]。エックハルトは言語に対するペシミズムを、沈黙の積極的意義への注目、そして言語を超克した神の存在の認識というダイナミズムに発展させていくのである。

一方、テルレスも沈黙を超越的存在と直結するものと捉えているが、彼に沈黙を受け入れる準備はまだできていない。彼は沈黙を一方では恐れており、他方では沈黙に引き寄せられもするのだ。彼はまた、自分のなかに「ほかの人よりももうひとつ余計に感覚があるようだ」と感じているが、「その感覚はまだ十分に発達していない」という[33)]。「ぼくにとって世界は

---

30) 香田芳樹：マイスター・エックハルト　生涯と著作〔創文社、2011 年〕6-7 頁および 16-21 頁を参照。

31) 上田閑照：マイスター・エックハルト　ドイツ語説教集〔ドイツ神秘主義叢書 2、創文社、2006 年〕116 頁。このほか、エックハルトは孤独と沈黙が神の言葉を聞く前提であることを、以下のようにも表現している。「魂の内においてイエスが語るためには、魂は、独りでなければならない。そして、イエスの語ることを聞こうとするならば、魂自身沈黙しなければならない。(…) 主イエスは何を語り給うのであるか。御自身がなんであるかを語るのである。ではイエスは何であり給うか。御父の言である。」(同上、13 頁)

32) 香田、前掲書 190 頁参照。

33) Musil: *Törleß*. S. 89.

音のない声だらけである。だからぼくは見者か幻視者なのだろうか？」[34]という彼の自問自答の中には、超越的存在の沈黙に未だ耐えることができないが、自分をはるかに超越した存在をとらえる可能性を自分が持っていることの予感があらわされている。このような、音のない沈黙のなかに響くはずの超越者の声を聴くことへの志向性は、意識や自我の領域を越えた自分と、神秘的・超越的存在とのあいだがつながる「第二の生」の発見へとテルレスを導いていく。次節ではこの「第二の生」に関し、具体的に考察していこう。

2-3.「第二の生」

バジーニいじめが教職員に露呈し、学校側の代表者を前に参考人として供述をする際にも、テルレスは「沈黙」について語らずにはいられない。バジーニに対する彼のふるまいや心情についての報告は、次第に、彼自身のうちにある謎めいた領域についての報告に変わっていくのである。彼は直観の領域のことを「第二の生」と呼び、以下のように語る。

> でもぼくのなかには第二の生があった。その第二の生はすべてを、知性の目では見なかった。ある思想がぼくのなかで生きはじめたとぼくが感じるときには、同時にぼくはこうも感じるのです。思想が沈黙しているときにものごとを見ていると、ぼくのなかで何かが生きているのだ、と。それは、ぼくのなかにある暗いものです。あらゆる思想のなかに隠れているけれども、思想では測れないものです。（…）この沈黙している生が、ぼくを暗い気持ちにさせ、ぼくの周りに押し寄せてきたのです。沈黙する生を見るようにと、ぼくはずっと駆り立てられていた。[35]

ここでテルレスが語る「第二の生」は、悟性の作用ではとらえることのできない領域であるため、思想の埒外にある。思想が「沈黙」した状態、す

---

34) Ebd.
35) Musil: *Törleß*. S. 136.

なわち悟性がはたらかない状態のなかでも、さらに事物や自分自身の本質を見出そうとする瞬間にたちあらわれてくる「沈黙する生」、言い換えれば「第二の生」こそ、テルレスが「混乱」の過程で見出そうとしているものだったのである。

この供述を聞いてあっけにとられた挙句、彼を小馬鹿にするような態度を見せる教師たちのように、「第二の生」は大部分の大人には非現実的な夢物語としか受け止められない。しかしながらムージルは、この神秘的な「第二の生」の探究が自らの文学における重要なテーマであることを認識していたといえる。この観点は、ムージル自身が懇意にしていた女友達のシュテファニー・ティルクに宛てた手紙（1905 年）のなかに書き記した、この物語のコンセプトにかかわる記述によって裏付けられる。ムージルによると、展覧会でみる絵のなかに「どのようにして、何によって」わかるのか知らずとも理解できる絵があるとき、「まるでもうひとりの人間がぼくのなかにいて、絵はこの人間と話し、その人間を瞬時に絵の圏内に引き込むかのよう」であるという[36]。すなわち彼曰く、「ぼくが本当の自分だと思って所有している人間は、そうした絵の影を理解したにすぎない」し、「ぼくたちが自分を所有していると思えるのは、自分を悟性的に把握できる限りにおいてでしかない」のである[37]。自分が理性的に把握する自分、すなわち自我意識は「絵の影」を理解するのみであり、その絵の奥底にある人の魂を揺さぶる力を感じとることができるのは、自我意識とは別の領域にある自己である。そしてそのような別の領域にある自己に対応するのが、テルレスのいう「第二の生」を生きる自己であると考えられよう。「第二の生」は、事物や自分自身のなかに潜在している、直観でのみ把握することができる領域であり、これを通じてはじめて事物や自分自身と神秘的・超越的存在とのつながりが見出される。この「第二の生」は、神秘思想と強い親和性を持つ。というのも、「第二の生」は「沈黙」と強く結びついているだけでなく、エックハルトの「像（Bild）」と同様の意味合いを担っているといえるからだ。「像」はトマス・アクィナスの「エッセ

36) Musil: *Briefe*. S. 14.
37) Ebd.

(存在)」に対応する概念で、知性認識そのものである神は、被造物を認識するため、みずからの像を被造物に分有する。エックハルトはこれを前提とし、像が被造物でありながら被造物的世界を超える契機であり、神との融和的合一（ウニオ）をもたらす媒介であると論じている[38]。それに対しムージルの語る別の領域にある自己、あるいは「第二の生」を生きる自己は、絵とのいわば対話を通じ、「絵の圏内に引き込まれる」という。これはいわば対象との神秘的合一であるといえる。

しかしムージルはさらに、神秘的合一が融和的に成就することの困難さにも目を向けることを忘れない。ムージルはさらに同じ手紙でこう語る。

> 自我は文字通り分裂するでしょう。二重の土台ができ、これまでひとつだけであった第一の自我の、曇ったガラスを通して神秘的な動きが見えるのですが、それを説明することはできない。ぼくはそこに悲劇性を見る。ぼくはその悲劇性を小説の本来のテーマにしました。[39]

第一の自我、すなわち「悟性的に把握できる」自我は「曇ったガラス」のように、対象の本質を直観的につかもうとする眼にとっての妨げとなる。「悟性的に把握できる」自我の向こう側にあり、直観的にのみとらえられる対象の本質の「神秘的な動き」は、悟性の作用に依拠する言語によっては説明できない。ムージルはここで、言語によっては直観の領域について完全に説明できないことを「悲劇」と呼び、それこそがこの作品を貫くテーマであると主張している。彼が直感の領域を前にしたときの言語の限界性を「悲劇」と呼ぶ理由は、彼のもつ技術者・科学者としての顔と深く関わっている。近代科学を学問的に修得し、厳密性を重んじるムージルにとって、言語を通じた客観的・合理的思考は大きな価値を有するのである[40]。

---

38) 香田、前掲書 267-270 頁 参照。

39) Musil: *Briefe*. S. 14.

40) 彼は物理学者マッハの著作に深く携わり、1908 年にはマッハの感覚論に関する博士論文を書き上げている。ムージルのこのエンジニア・科学者としての性格をくみ取った観点としては、『テルレス』のなかに、ユークリッドから始まり、自律した記号体系に発展していく数学史が凝縮されていることを指

彼によれば、あくまで悟性に依拠した事物の厳密な記述を徹底的に目指す姿勢はある瞬間に突破される。その先に切り拓かれる、ムージルののちの言葉でいえば「別の状態」[41] への志向性が、彼の処女作においても貫かれているのではないだろうか。

3. ムージル作品の神秘思想における子供の役割―結びにかえて

ここまで『テルレス』における神秘思想的観点に関して論じてきたが、ここで再びはじめの問いに立ち帰りたい。なぜムージルはあえて子供のまなざしを通じて神秘思想的観点を描き出そうとしているのだろうか。これは『テルレス』だけでなく、後期の『黒つぐみ』や『特性のない男』にも関わる問いである。なぜなら後期の作品において、登場人物は自らの子供時代を追体験・再構成する過程でこそ、神秘的自己変革・自己再生へと導かれていくからである。ではまず、この 2 作品の神秘思想的側面と子供時代とのあいだの結びつきについて確認しておこう。

『黒つぐみ』は 1928 年に初めて発表され、のちに『生前の遺稿（*Nachlaß zu Lebzeiten*）』（1935 年）に収録された小品である。この作品は、同級生どうしの A2 が A1 に対し、日常のなかに不意に垣間見える超現実的・神秘的な瞬間について語り聞かせるという体裁をとっている。A2 が語る 3 つの物語のうち、特に最後の物語は子供時代と深く関わっているといえるだろう。両親の死後、A2 は実家を訪れ、「屋根裏に子供の本ばかり

摘する高次裕の研究が挙げられる。高次裕：数学史の中に置いたムージル『寄宿生テルレスの混乱』〔『ドイツ文学』第 148 号、2014 年、209-223 頁〕参照。

41) 「別の状態」はムージルの作品を貫く重要な概念である。これは、「測定・計算・検証という実証的・因果的・機械的思考」に支えられた「通常の状態」に対峙する、「愛の状態・美の世界離脱の・瞑想の・観照の・神への接近の・忘我の・意志喪失の・内相の状態」を指す。〔Vgl. *Ansätze zu neuer Ästhetik*. In: Gesammelte Werke in 9 Bänden. Reinbek: Rowohlt 1978. Bd. 8, S. 1143f.〕および、大川勇：千年王国を越えて―ムージルの『特性のない男』における〈別の状態〉の行方〔『研究報告』第 2 号、1986 年、14-51 頁〕も参照。

がぎっしりつまった大きな箱」を見つけたという。そして「誰も来ないときには、ぼくはじっと座ったまま子供の本を読んでいた」と語る[42)]。特に彼はある1冊の絵本に30年前の自分の指の痕跡を見つけたことを、「天地がひっくり返ったような事件」と言い表している[43)]。A2のこの反応は、失われたはずの子供時代が、物理的にも自分の心情のなかにもまだ痕跡をとどめていたことに対する純粋な驚きであるといえよう。また彼はかつて過ごした子供部屋を発見すると、その部屋で「一日の多くの時間を過ごし、腰かけると足が床まで届かない子供のように本を読んだ」のだった[44)]。ここでA2は子供になりきり、子供時代を追体験しているのである。渡辺幸子は、『特性のない男』の登場人物ウルリヒ、アガーテ、そして『ポルトガルの女（*Die Portugiesin*）』（1923年）の登場人物ケッテンに注目し、「ムージルの主人公たちが挫折によって向き合うことになるのは、孤独ではなく自らの子供時代である」と指摘している[45)]。従軍先のロシアで捕虜となり、革命を経験した後、ドイツに帰国して商売を始めたA2の暮らし向きはよいとはいえず、両親の生活も楽ではなかった。そしてその矢先父と母を立て続けに失ったA2も、子供時代の追体験を求めるのだった。そして子供部屋で眠るA2の下に、「わたしはあんたのお母さんなのよ」と語りかける黒つぐみが窓から舞い降りる[46)]。A2はそれが子供のときに飼っていた黒つぐみと同じなのではないかという予感を抱きつつ、黒つぐみとの共同生活を始める。さらに彼は、「黒つぐみを飼うことになったあの日からあとほど、ぼくが善人だったことは生涯に一度もなかった」とも語っている[47)]。このようにA2は両親を失った孤独を経て不可思議な黒つぐみと触

---

42) Musil: *Die Amsel*. In: Gesammelte Werke in 9 Bänden. Reinbek: Rowohlt 1978. Bd. 7, S. 560.　引用に際しては、ローベルト・ムージル（川村二郎訳）：三人の女・黒つぐみ〔岩波文庫、1991年〕を適宜参照した。

43) Ebd. S. 561.

44) Ebd.

45) 渡辺幸子『窓ガラスの内と外—ムージルにおける『子供』について—』〔『オーストリア文学』第17号、2001年、43-50頁〕47頁参照。

46) Musil: *Die Amsel*. S. 561.

47) Ebd. S. 562.

れ合うことにより、過去・現在・未来の境界、さらには生と死の境界を超えた状態を体験するのである。このとき黒つぐみは、エックハルトの「像」およびテルレスの「第二の生」、すなわち被造物でありながら被造物的世界を超える契機をもたらすものであると捉えることができる。そして子供時代の追体験を通じてこの神秘的な黒つぐみと生きるようになったあと、A2 は「善人」、すなわち魂の「善さ」を新たに獲得した者になったという。この魂の「善さ」に関しては作品中で具体的に記述されていないが、「善さ」は神的存在の本性であり、A2 が孤独のなかでの黒つぐみとの再会を通じて超越的存在との融和にいたったことが推測される。

『特性のない男』はムージルのライフワークとなった未完の長編であるが、この作品の焦点は主人公ウルリヒと彼の妹アガーテとのあいだの神秘思想的な愛の諸相にある。父を亡くしたウルリヒは葬儀のために実家に戻り、長らくの別離のあとで妹アガーテと再会を果たす。そしてそれぞれに挫折と失望を抱えた兄妹は「ふたり暮らし」を始め、そのなかでふたりの精神的・肉体的合一が目指されていくのである。渡辺幸子が指摘するように、アガーテに再会する前のウルリヒに特徴的な、密室に閉じこもって窓の外を眺めるポーズは、子供部屋の孤独な子供の姿と結びついている[48]。しかし彼は、再会を果たした妹アガーテと子供時代を追体験し、愛を育んでいくようになる。ふたりはまず、それぞれのかつての子供部屋で時を過ごし、子供時代を回想する。遊んでいてずぶ濡れになったのを隠そうとしたウルリヒの滑稽な姿、何かの儀式のように爪や髪を切って土に埋めた日などの共通の思い出は[49]、「孤独以前のあらゆるものとのゆるやかな結びつきを喚起して身体感覚や感情を蘇生させ、愛へと向かうための契機」となり、「過去へ逆行していた時間は現在に戻って、兄妹は再び未来へと向かいはじめる」[50]。ウルリヒが妹アガーテとともに部屋から庭に出て哲学的な語らいを始めたことは、ウルリヒがアガーテとの新たな関係性を求め

---

48) 渡辺、前掲書 44 頁参照。

49) Vgl. Musil: *Der Mann ohne Eigenschaften*. In: Gesammelte Werke in 9 Bänden. Reinbek: Rowohlt 1978. Bd. 3, S.701, 706-707.

50) 渡辺、前掲書 49 頁参照。

て未来へと向かい始めたことを象徴的に示しているのである。つまり、ふたりの関係性を特徴づけるのは、過去を受け入れ、過去を乗り越え、そして新たな未来の愛の境地へ向かおうとするダイナミズムであるといえるのだ。そしてこれを基盤とし、ウルリヒとアガーテは自分たちが「愛の千年王国」に向かっていると認識していく。ふたりが目指している「愛の千年王国」は、強固な現実に対する厳しい批判意識を保ちつつ、不断に、そして様々に自己を更新し、自己の可能性を開発していくなかで見出されるはずの、ふたりの神秘的な合一状態であると説明できる。

以上確認してきたように、ムージルの重要な後期 2 作品において、子供時代と神秘思想は親密に結びついている。そして『テルレス』においても、子供のまなざしが神秘体験を導き出す重要なファクターであると考えられる。その理由は、まずテルレスという名前から解き明かすことができる。テルレスの名の由来はコリーノが指摘するように「門（Tor）- なし（less）」という造語から理解でき、確かにこの作品において「門」は重要なモチーフとなっている[51]。なかでも、とりわけ以下の叙述は作品解釈に決定的な意味をはらんでいるといえるだろう。

> 遠くから見ると、とても大きくて神秘的に見えるものはいつも、単純で、ゆがめられず、自然で日常的なプロポーションでやってくる。まるで人間のまわりには、目に見えない境界線が引かれているかのようだ。境界の外で準備され、遠くから近づいてくるものは、霧の海のようで、変化する巨大な姿でいっぱいだ。人間に近づき、行為となり、人間の生活にぶつかるものは、クリアで小さく、人間の次元と人間の輪郭をもっている。人間が生きる人生と、人間が感じ、予感し、遠くから見る人生とのあいだには、狭い門のように、目に見えない境界線がある。出来事のイメージが人間のなかに入っていくためには、その門で圧縮される必要がある。[52]

---

51) Corino: a. a. O. S. 249.

52) Musil: *Törleß*. S. 106.

この記述における「門」は「境界線」とも呼ばれているが、超越的・神秘的次元の体験（「遠くから見ると、とても大きくて神秘的に見えるもの」、「霧の海のよう」な、「変化する巨大な姿」あるいは「人間が感じ、予感し、遠くから見る人生」の体験）を日常世界の次元（「人間が生きる世界」の次元）の枠にはめ、悟性で明晰に理解できるもの（「単純で、ゆがめられず、自然で日常的なプロポーション」をもつもの、あるいは「クリアで小さく」、「人間の次元と人間の輪郭」をもつもの）にする役割をもっていることがわかる。また「門」は、テルレスが足を踏み入れる寄宿舎の「門」が示すように、法秩序に支えられた権力の象徴でもある[53)]。すなわち「門」は日常生活の強固な秩序に人間を馴致するための装置、あるいは法によって社会秩序を構築していく権力機構を体現したものなのである。この「門」への組み込みが社会化の一端であるが、テルレスは「門なし」、すなわち未だ社会化されていない子供だ。そしてさらに、最終的に寄宿舎から逃げ出し退学を選び取るテルレスは社会化に失敗したのではなく、大人たちから強制された社会化を自ら拒んだのだと読み解くことができる。このような社会化以前の子供の視点こそ、神秘的・超越的存在を直観する可能性を切り拓いていくのではないだろうか。A2、ウルリヒ、アガーテが社会化以前の子供時代への回帰を果たすのも、これを前提としていると考えられる。「門」による制約を受けず、日常生活を越えた存在を感じとろうとする子供の感覚が、ムージルが描き出す神秘的体験において欠かせない意義を担っているのである。「第二の生」を追求するテルレスの葛藤は完全に解消されたわけではないが、テルレスの葛藤はやがてA2やウルリヒ、アガーテに受け継がれ、ムージルの神秘主義的文学の系譜をかたちづくる原動力となっていく。

（慶應義塾大学大学院 文学研究科 独文学専攻 後期博士課程 1 年）

---

53) 「門」に関しては、「これでお別れだと学校の門がテルレスの背後で閉まった瞬間から、テルレス少年は激しく恐ろしいホームシックにほとんどずっと苦しんだ」という記述がある。Vgl. Musil: *Törleß*. S. 8.

Ins „zweite Leben“

Über Kinder und Mystik bei Robert Musil

MIYASHITA, Minami

Warum wagte es Robert Musil (1880-1941), trotz seiner starken persönlichen Abneigung gegen Kinder in seinem ersten Werk *Verwirrungen des Zöglings Törleß* (1906) ausgerechnet Zwölfjährige die zentrale Rolle spielen zu lassen? Das ist eigentlich das einzige Werk von ihm, in dem Kinder in den Vordergrund treten. Eine Antwort darauf finde ich in Bezug auf Mystik, für die sich Musil schon in jungen Jahren interessierte. In der bisherigen Forschung wurde der *Törleß* hauptsächlich unter vier Aspekten analysiert: die autobiographischen Spuren (Corino, 2003), die Züge als Schulroman (Bauer, 1973/ Kroemer, 2004), Sprachskepsis (Ohko, 2002/ Kiyohara, 2007) und die Kritik am festen Rahmen der „Realität“, die die Subjektivität eines jeden unterdrückt (Fuder, 1979/ Inoue, 1983/ Howald, 1984). Zum letzten Punkt möchte ich aber noch anmerken, dass die Subjektivität des *Törleß* nicht identisch mit der modernen, abendländischen ist, die die Sicherheit des denkenden und handelnden Ichs voraussetzt. Sondern es ist eine mystische: Im späten 19. und frühen 20. Jahrhundert wurden die mystischen Gedanken von manchen Künstlern und auch Wissenschaftlern neu bewertet. Denn es verlangte sie danach, durch die Rückkehr zu mittelalterlichen Gedanken bzw. ihren Ursprung einen Ausweg aus der Eschatologie zu finden, die von den sich immer mehr verbreitenden Klassen- und Volkskämpfen verursacht wurde. In dieser Tendenz las auch Musil die Werke von Meister Eckhart sorgfältig. Auf die mystische Neigung des *Törleß* wurde schon im Zusammenhang mit Maeterlink und Emerson hingewiesen (Kroemer, 2004), aber der Einfluss von Eckhart ist auch nicht zu übersehen: Im Verlauf des Romans sucht Törleß das „zweite Leben“

bzw. den potentiellen Zustand der Seele, in dem er das Transzendentale direkt fühlen kann. Die Resonanz zwischen den beiden wird darin deutlich, dass Einsamkeit, Schweigen und Sprachskepsis sowohl im *Törleß* als auch in Eckharts Gedanken erforderlich sind, um Einsicht in das Transzendentale zu erlangen. Da wird der Pessimismus gegen die Sprache in eine Entdeckung des positiven Sinnes von Schweigen umgewandelt und dann zur Einsicht in das außersprachliche Transzendentale entwickelt. Außerdem ist die Perspektive der Kinder auch in Musils späteren Werken unentbehrlich: In *Die Amsel* (1928) und *Der Mann ohne Eigenschaften* (1931/33) erreichen die Figuren eine Selbsterneuerung, die durch die Rekonstruktion ihrer Kinderzeit und die folgenden mystischen Erfahrungen ermöglicht wird. Die Kinder, die den unterdrückerischen sozialen Normen entgehen und durch den mystischen Zustand eine Reformierung des alltäglichen Lebens versuchen, prägen den mystischen Charakter bei Musil.